

京芸通信

Kyo-gei Tsushin

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts — founded in 1880 —

Vol. 016

京都市立芸術大学
広報誌
2013年 3月

受賞者インタビュー

プロダクト・デザイン 修士1回生

平澤 麻

教員インタビュー

版画専攻 講師

大西信明

京芸で、日本の伝統音楽に触れる

「くすみ・訛り・摩滅を生きる」

日本伝統音楽研究センター 教授

藤田隆則

リレーコラム

彫刻専攻 教授

中原浩大

特集

音楽学部、創設60周年 音楽学部創設60周年 記念事業開催レポート

京芸の一年間 2012.4 ~ 2013.3

公立大学法人化記念シンポジウム／キャリアアップセンター設立／中央美術学院（中国）との交流協定締結／「京都芸術教育コンソーシアム」の設立／東日本大震災災害支援チャリティーオークション「サイレントアクア 2012」／アーティスト・イン・レジデンス事業／連続シンポジウム「創造のためのアーカイブ」

京芸の教員

11名の客員教授を採用



2012年、京都市立芸術大学音楽学部は創設60周年を迎えました。1952年に全国初の公立音楽大学として京都市立音楽短期大学を開学し、1969年に京都市立美術大学と統合して京都市立芸術大学となり、現在の音楽学部となりました。

創設当時から変わらない少人数教育のもと、優れた音楽家や研究者を輩出してきた音楽学部。ご支援いただいた方々をはじめ、すべての市民の皆様へ感謝し、京芸の音楽教育の成熟と発展の一助となるよう「音楽学部創設60周年記念事業」を行いました。



前田 守一
音楽研究科長

Shuichi Maeda

山本 毅
音楽学部長

Tsuyoshi Yamamoto

山本毅 音楽学部長 × 前田守一 音楽研究科長
「これからの音楽学部・音楽研究科」

音楽学部、創設六〇周年

京芸の音楽学部は、単に音楽家としてのスキルを授けることにとどまらず、音楽の存在意義を社会に提示できる人材の育成をして行かねばと考えています。わかりやすくいえば、「音楽ってこんなに素晴らしい芸術ですよ。音楽と音楽家が存在するこの世界って素敵でしょ？」って、その生き様で示せる人材を送り出したいということです。

社会の変化は激しいですから、大学は機敏に対応していかねばならないでしょう。ただ、新しいことを進めていくにしても、京芸の良いものを失わないように進めていければと思います。京芸が持っている素晴らしいもの、それは少人数教育を堅持し、学生の個性と創造性を尊重する学風です。そういうものを大切にしながら、どう勝負するのかを見極めて挑戦していきたいと思います。

京都市立芸術大学 音楽学部 60年の歴史

1952

京都市立音楽短期大学開学（音楽学部の前身）
*校舎は北区出雲路立本町

1954

短大第1回卒業演奏会を開催

1956

左京区岡崎へ移転

1969

京都市立美術大学と統合して京都市立芸術大学音楽学部（4年制）となる
作曲、ピアノ、弦楽、管打楽、声楽の5専修*、定員60名
*「専修」は現在の「専攻」にあたり1999年に「専攻」に変更

1972

第1回卒業演奏会を開催

1980

京都市立芸術大学創立100周年を迎える
記念演奏会を大阪フェスティバルホールで開催する
西京区の現在地へ移転

1986

大学院音楽研究科修士課程設置
作曲・音楽学、器楽（ピアノ、弦楽、管・打楽）、声楽の3専攻、定員20名

1987

第1回大学院オペラ公演を開催

1990

京都市立芸術大学創立110周年記念コンサートを開催

1992

コロラド夏季音楽祭にて「京都市立芸術大学特別公演」開催

1998

第100回記念定期演奏会を京都コンサートホールで開催、指揮は卒業生の佐渡裕氏

2000

京都市立芸術大学創立120周年プラハ公演を敢行
日本伝統音楽研究センターを設置

2002

音楽学部創設50周年祝賀記念式典を挙行政、ドイツ公演を開催
学部に音楽学専攻を設置、定員63名

2005

大学院音楽研究科に博士（後期）課程を開設
作曲・指揮専攻、器楽専攻（ピアノ、弦楽、管・打楽）、声楽、音楽学の4研究領域、定員5名

2004

修士課程を作曲・指揮専攻、器楽専攻（ピアノ、弦楽、管・打楽）、声楽、音楽学の4専攻に再編、定員21名

2005

大学院オペラ公演初の京都府会館公演

2010

京都市立芸術大学創立130周年記念として、第136回定期演奏会「更なる復活」を開催

2012

音楽学部創設60周年を迎える

Cast and Program

【記念講演】

エリック・コロソ氏 「クラシック音楽に未来があるか?」

Eric Colon / 鼓呂雲 恵理 駆

元ベネズエラ国立音楽学校長。1938年ベルギー生まれ。作曲、教育、演奏家。交響詩「アメリカ大陸の夜明け」でカラカス作曲大賞受賞。ベネズエラ文化功労賞受賞。

【記念演奏】

1. J.S. バッハ (エルガー・ハワース編曲)
ブランデンブルク協奏曲第3番
演奏: 京都市立芸術大学金管合奏団
2. F. メンデルスゾーン
ピアノ三重奏曲第1番二短調作品49より第2・第4楽章
演奏: 豊嶋泰嗣 (Vn) / 上村昇 (Vc) / 上野真 (Pf)
3. A. ルーセル
ロンサールによる2つの詩より わが愛しのナイチンゲール他
演奏: 日紫喜恵美 (Sop) / 大嶋義実 (Fl) / 土居知子 (Pf)

門川大作京都市長をはじめ多数の来賓や大学関係者、市民の皆様にご出席いただき、元ベネズエラ国立音楽学校長のエリック・コロソ氏の記念講演や教員による演奏など、60周年記念にふさわしい華やかな式典となりました。



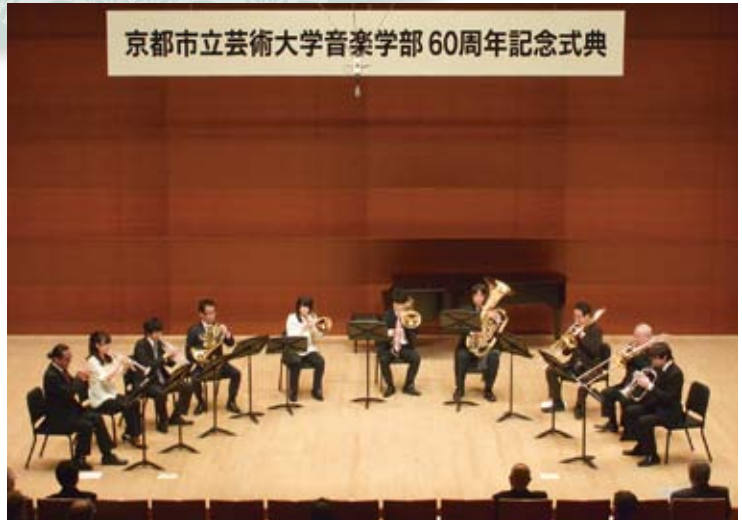
建島哲 学長



門川大作 京都市長



大西均 京都市会議長



京都市立芸術大学音楽学部 60周年記念式典



大村益雄「真声会」会長



エリック・コロソ氏

エリック・コロソ氏 記念講演 要旨

近年の録音技術や通信技術などの進歩により、音楽の世界も大きく発展した一方で、音楽家と聴衆の関係が希薄になったように思えます。音楽とは気持ちを伝えること。今後も、世界はめまぐるしく変化していき、それを予測することは難しいです。しかし、人間の心は変わらない。音楽は、「愛」や「希望」など言葉にできないものを表現することが出来ます。また、「美しい」と思う気持ちは世界がどれほど変わっても絶対に存在し続けます。クラシック音楽が今後も続いていくためには、規模の発展に捕われず、音楽家が聴衆と人間関係を保つことが出来る距離で、素晴らしい演奏を続けていくことが重要です。

音楽学部創設60周年記念式典 関係各位によるコメント

建島哲 学長

音楽学部は、短期大学に始まり今日まで、国際的に活躍する人材を数多く輩出し、着実な発展を遂げてまいりました。温かい目で見守っていただいた京都市民の皆様へ感謝しております。今年度、法人化し、次の時代を開く時にきています。音楽学部のますますの発展に引き続きのご支援をお願いいたします。

門川大作 京都市長

京都市立芸術大学音楽学部は、芸術文化都市・京都の、そして日本の宝です。昭和27年、戦後の大変な時に京都の音楽を愛する市民が、五十年後、百年後の京都、日本を思い、音楽こそが日本を明るくすると確信して大学を作られた。先人の努力に感謝の気持ちでいっぱいです。

大西均 京都市会議長

全国初の音楽短期大学としてスタートし、教員の皆様のおかげでは、後進を育成しながら、演奏家として音楽界をリードされてこられました。心から敬意を表します。京都芸大に寄せる京都市民の皆様への期待は大きく、音楽教育の拠点として更に発展していただきたいと願っています。

大村益雄 音楽学部同窓会「真声会」会長

今日の式典は本当に素晴らしいかったです。非常にクオリティの高い、歴史的な記念演奏で、心に残る演奏でした。

Cast and Program

【演目】

デュリュフレ/レクイエム
ラフマニノフ/交響曲 第2番

【指揮】

尾高忠明(客員教授)

【ソリスト】

折江忠道(音楽学部教授)
小濱妙美(音楽学部准教授)

【管弦楽】

京都市立芸術大学音楽学部管弦楽団

【合唱】

京都市立芸術大学音楽学部合唱団
京都市立芸術大学卒業生(真声会)
市民有志



小濱妙美 准教授



折江忠道 教授



尾高忠明 客員教授

コンサートマスター：丸山韶

Comments

演奏者のコメント

私にとって、4回目の京都芸大のコンサートは感動的だった。毎回向上していると感じていたが、今回は圧倒的な実力を発揮してくれた。デュリュフレの繊細さ、美しさ、ラフマニノフの歌、ロマンティズム、豪快さ!いずれも素晴らしく私自身が聞き惚れてしまった。

京都芸大の持っているポテンシャルは非常に高い、その上に各学生の人間性をはぐくむ校風! 60周年をこの様に通過出来た京都芸大が、70周年、そして100周年に向けて、益々素晴らしい人材を世に送り出して行くことを確信した!

【尾高忠明/客員教授】

尾高先生は、細かい指示を出される時でも、先生ご自身が体験されたことを交えて面白く話してくださり、長時間の練習も苦にならないほど、みんな楽しく本番に向けて準備できました。僕はコンサートマスターとして、尾高先生から「管楽器に合図を出すときには、相手と直接目を合わせるといいよ」とアドバイスをいただきました。それまで、視線を相手に向けながら体を使って合図していましたが、アイコンタクトを取ることで、相手がどういう風に動くかがダイレクトにわかるようになり、非常に演奏しやすくなりました。

一人一人が演奏技術を高め、尾高先生の指導によって音楽的な表現を磨けたおかげで、本番はみんなが音楽に没頭でき、完成度の高い演奏をお客さまにお届けできたと思います。

【丸山韶/ヴァイオリン・4年生】

音楽学部創設60周年記念事業総決算の大演奏会。客員教授に就任された尾高忠明先生の指揮により、約1,450名の方々に来場をいただきました。

開演前のロビーには、フルート四重奏と柿沼敏江音楽学部教授によるプレトークがあり、軽やかな演奏とパフォーマンス、わかりやすい説明で、ご来場のみなさまに開演までのひと時を楽しんでいただきました。

いよいよ幕をあげた本番では、デュリュフレ作曲「レクイエム」では、教員による独唱、卒業生や市民有志も参加した合唱、そして学生オーケストラが一体となって演奏。荘厳な空気に触れたご来場の方々は、深く聞き入っておられました。さらに、ラフマニノフ作曲「交響曲 第2番」では、尾高先生のリズムのもとに、学生が息の長い旋律を見事に弾ききりました。ラフマニノフの魅力を余すところなく表現した学生に対して、会場から称賛の大きな拍手をいただきました。

アンサンブルのためのワークショップ

11月2日(金)

京都コンサートホール アンサンブルホールムラタ

その上で、「背中を客席に向けていないように」「大勢で舞台上立つときは一列に並ばないように」「常に動いていること



「アンサンブルのためのワークショップ」は、音楽学部・音楽研究科の音楽専攻生が披露するオペラ・ガラコンサートを、世界の第一線で活躍するウィーン国立歌劇場専属合唱団員が、直接ノウハウを伝授し、こ来場の皆様と一緒に音楽を創り上げる楽しさを味わっていただくという企画。

合唱ディレクターのトーマス・ラング氏をはじめとする有志14名をお迎えして始まったワークショップは、声楽専攻の学生が、G. ドニゼッティ作曲の「愛の妙薬」を披露するところから始まりました。存分に実力を発揮した舞台上に、団員の方からも「演技力も音楽性も高く、とても驚きました」とのコメントとともに、大きな拍手をいただきました。

最後に、P. マスカーニ作曲の「カヴァレリア・ルステイカーナ」が合同で歌われ、感動の拍手が鳴りやまない会場は、幸せな余韻に包まれました。

さらに、合唱団員の方々が歌ってくださったとのアナウンスがあり、会場がどよめきました。「婚礼の合唱」(オペラ「ローエングリン」より)の静謐な歌声に、会場が沸き立ちます。

公演の間には、団員の方に学生が直接質問する一場面も。「体調管理の方法は」、「子育てと演奏活動の両立はどうしているか」など、プロの声楽家を目指す学生の率直な質問に丁寧にお答えいただきました。

団員のアドバイスで、学生の動きにメリハリが出てくると、舞台はさらに華やかになり、プロの指導の効果を客席の皆様も感じておられました。

「大切」など、演技をアドバイスしていただきました。続いて演奏された「ジュトラウスII作曲の「こころもり」では、即興でのワルツ教室も始まり、歌うだけでなく舞台上で演じる極意を教わりました。



Comments

伊地知宏幸氏のコメント



本番直前まで「どのようなものになるか」というヴィジョンがなかなか固まらなかったのですが、当日、学生さん達と初めて舞台上で会った時に、その不安は吹き飛んでしまいました。そこには成功を裏付ける「熱い思い」の存在を強く感じたからです。

情熱がわからない時も努力し続ける、「音楽が好きだ」という思いが継続を生み出し、それが情熱へと変わっていきます。世界最高峰のオペラ座のメンバーと共に歌い語り合った日のことを心に刻んで、これからの日本の音楽界のリーダーとなるべく頑張ってください。

【ウィーン国立歌劇場専属合唱団 第1バス】

Comments

参加した学生のコメント

合唱団の方に「手や表情ではなく、声だけで全てを表現できるように」というアドバイスをいただいたのですが、本番のシーンを思い出すと、確かに、声だけで臨場感にあふれる舞台になっていたんです。今回の素晴らしい経験を生かして、もっと意識して内面から演じられるようになりたいです。

【川崎慎一郎/修士2回生】

私は、コーラスで一列に並んでしまいがちだったのですが、どンドン前に出ていく合唱団の方を目の当たりにして、「恥ずかしい」という意識が飛んでいきました。日頃から先生が言われる「声は自分の気持ちがそのまま表れる」ということを、身をもって実感しました。これからは自分の歌が前向きなものに変われると思います。

【伊藤黎/3回生】

1回生で本場のウィーンの方々の合唱を聞けたり、先輩たちとオペラができたことは、すごく良い経験でした。合唱団の方は、表情や表現など、ありのままの自分を出して歌っておられました。自分を出して歌うことが苦手な私も、練習してできるようになりたいです。

【松村璃子/1回生】

本番までは、一人一人にはアドバイスをもらえないと思っていましたが、一対一で踊ったり一緒に演技したりと、こんなに身近に同じ舞台上立てて本当に幸せです。それまで自分の将来をあまり意識していなかったけれど、音楽家として「舞台上で歌っていきたい」と強く思うようになりました。

【今西梓/2回生】

合唱団の方々は、楽譜どおり忠実に演奏するというだけでなく、技術的にきちんと響き渡るように歌っておられました。その響きはごく「自然」に聴こえました。そのうえ、心のままに、情感たっぷりに歌っておられることを体感しました。今回の経験を糧に、私も声で素敵な表現ができるようになりたいです。

【泉萌子/修士2回生】



東京藝術大学×京都市立芸術大学 交流演奏会

11月1日(木)
東京藝術大学音楽堂



Cast and Program

【指揮】

増井信貴(本学音楽学部教授)
ダグラス・ポストック(東京藝術大学音楽学部招聘教授)

【演奏】

京都市立芸術大学音楽学部・大学院管弦楽団
東京藝大シンフォニーオーケストラ

【演目】

ラフマニノフ/交響的舞曲 作品45(東京藝大シンフォニーオーケストラ)
ムソルグスキー(ラヴェル編曲)/組曲 展覧会の絵(京都市立芸術大学音楽学部・大学院管弦楽団)
エルガー/威風堂々 第1番 作品39(両校合同オーケストラ)



京都市立芸術大学と東京藝術大学の交流演奏会が、60周年を機に初めて実現。長い歴史の中で培ったそれぞれの音楽教育の成果を融合し、一つの楽曲を作り上げることに挑戦しました。これまで数々の演奏家を輩出してきた両校に対する注目は高く、会場の東京藝術大学音楽堂には、開場の数時間前から列ができるほどでした。

満席の演奏会は、まず東京藝大シンフォニーオーケストラ、続いて京都芸大管弦楽団が演奏しました。管弦楽団は、増井教授の指揮に盛り上げられながら、初めて京芸の演奏を耳にする多くの来場者を、豊かな感情表現で京芸の音の世界へと誘い込みました。フィナーレを飾る両校合同オーケストラの演奏では、ポストック招聘教授の指揮のもと、学生が息の合った優雅かつ力強い演奏で来場者の期待に応え、交流演奏会は、大盛況のうちに幕を閉じました。

京芸生にとって、普段とは違う緊張感の中で実力を発揮することが求められた今回の演奏会。共に音楽の道を進む東京藝大の学生と交流を深めながら臨んだ本番で、自らの実力に確かな手ごたえを感じました。この有意義な経験を、必ずや今後の演奏活動に生かしてくれることでしょう。

Comments

参加した学生のコメント

私は合同オーケストラを本当に楽しみにしていたので、「威風堂々」の本番はとても刺激的でした。本番前のゲネプロでは、双方の弾き方もすごく違っていましたが、ポストック先生からは、あえて何も指示がなかったんです。それで、本番はお互いの違いを認識しながら、寄り添い合うようにして弾きました。今回の演奏会では、実力を試そうという気持ちの一方で、「京芸の顔」として舞台上立つことにかかなりの緊張感がありましたが、ここまで学生同士が作り合う経験は初めてで、とてもワクワクしました。

交流会や演奏を通じて感じたことは、東京藝大の学生には“芯の強さ”があるということです。私自身そういう点を見習って、音楽家として“しっかりしたもの”が身に付けられるように練習していきたいです。

【古川葵/ヴァイオリン・4回生】

東京藝大の演奏を聴いて、率直に「上手い!」と思いました。学生の中には、東京での本番という事もありゲネプロの時点で圧倒されて、不安が高まっている友人もいましたが、「展覧会の絵」の演奏では、冒頭の山崎浩司くん(4回生)のトランペットの素晴らしい音色を受けて、みんなが落ち着いて普段通りの実力を発揮でき、続く合同演奏も楽しむことができたと思います。

東京藝大の演奏からは、個々人が自分を強く持っている様子が伝わってきました。技術や音楽性を磨くことはもちろんですが、何事にも積極的に取り組み、精神的な強さも身に付けた音楽家になれるよう、日々研鑽を積んでいきたいです。

【坂本佳織/トランペット・4回生】

【演目】

- 1 中村典子 (本学音楽学部作曲専攻准教授) / 蓮月心 RENGETSU-SHIN
箏: Natalia F. Klobukova (日本伝統音楽研究センター招聘研究員)
- 2 George Benjamin / 'FLIGHT' FOR UNACCOMPANIED FLUTE
フルート: Claire Wickes [英国王立音楽大学]
- 3 Benjamin Britten /
2 MOVEMENTS, CANTO 1 AND FUGA, FROM 'CELLO SUITE NO 1'
チェロ: Anne Chauveau [英国王立音楽大学]
- 4 J.S.Park / 'SORI I' FOR FLUTE SOLO
フルート: Lee Hye-Kyung [檀国大学校音楽大学]
- 5 Matt Thurtell / THALUTTU (LULLABY) FOR SOLO PIANO
ピアノ: Andrew Ball [英国王立音楽大学]
- 6 矢代秋雄 / 2本のフルートとピアノのためのソナタ
フルート: Lee Hye-Kyung [檀国大学校音楽大学]
フルート: 大嶋義実 (本学音楽学部管・打楽専攻教授)
ピアノ: Lee Hyung-Min [檀国大学校音楽大学]



Natalia F. Klobukova 招聘研究員



Claire Wickes 氏



Anne Chauveau 氏



Lee Hye-Kyung 氏, Lee Hyung-Min 氏, 大嶋義実 教授

国際交流協定締結校の英国王立音楽大学(イギリス)と檀国大学校音楽大学(韓国)から、教授と学生をお招きした国際交流演奏会を開催しました。
ご来場いただいた方々は、イギリス、韓国、日本それぞれの文化を背景とする楽曲の共通点・相違点を感じながら、3校の教授と学生が繰り広げる演奏を堪能されてきました。

Comments

アンドリュー・ポール氏のコメント

英国王立音楽大学(ロンドン)からの代表として2名の学生、アンヌ・ショヴォーとクレア・ウィックスと私はこのコンサートで驚くほど楽しく、有意義な時間を過ごしました。そこには京都芸大の教員、学生、職員との心からの交流、協力があり、お互いの文化を称える気持ちがありました。また、現代音楽のために準備してくださったこの素晴らしい空間には想像力に富んだおもてなしの気持ちをひしひしと感じました。英国王立音大の2名の作曲学生も彼らの曲がそこで演奏されたことに感動しました。温かい歓迎をありがとうございます。私たち3名は思い出に残る音楽的経験をしただけでなく、たくさんの新しい友達ができたと感じています。



【英国王立音楽大学ピアノ専攻教授】

News!

大学院音楽研究科修士課程に新しく「日本音楽研究専攻」を設置します

2013年4月から大学院音楽研究科修士課程に新しく「日本音楽研究専攻」を開設します。

本専攻では、伝統音楽や芸能を深く研究し、その価値を的確に評価して説明・紹介できる人材を育てます。

近年、グローバル化が進む一方で、地域独自の音楽や芸能などの無形文化遺産を保存・継承していくことの重要性が高まる中、多くの伝統音楽や芸能が人々に支えられながら息づく京都において、その価値を再発見し、再創造できる人材の育成が、大学院教育に求められています。

2年間の研究や実践を積んだ修士生は、実演家を支えるマネジメントや、文化をプロデュースしコーディネートできる人材として活躍することが期待されます。



特徴

演奏を理論・歴史・文化・思想などの多方面から正しく位置づけ、その価値や意味を見い出せる能力の形成

音楽や芸能の実技を理解するため、研究だけではなく演習科目を開講

学生が実際の芸能者のもとに向いて学ぶ実技教育を企画

公演パンフレットの作成、ワークショップやコンサートの企画などを通じて、研究内容を適切に表現・発表する力を習得

問合せ

教務学生支援室 075-334-2222



MITSUBISHI
CHEMICAL JUNIOR
DESIGNER AWARD 2012
向井周太郎賞 受賞

プロダクト・デザイン
修士課程 1 回生

平澤 麻



—「MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2012 向井周太郎賞」のご受賞、おめでとうございます。受賞作品「潤杯（じゅんばい）」に込めた思いを教えてください。

この加湿器を置く事で、ただ部屋を潤すだけじゃなく、部屋をしつらい、風情を感じて頂けたらと思い制作しました。私は以前から日本の美意識に興味があったんですけど、日本には、風鈴や水盤などの季節ごとに情緒や感性を刺激するようなものがたくさんありますよね。そういう日本の感性に関したものを卒業作品では作りたいと思うようになりました。

卒業制作という4年間の集大成のような作品をこのように評価して頂いたことにも感謝しています。今回の受賞で「潤杯」をより多くの方に見て頂く機会を得ることができとても嬉しく思っています。

なぜ日本の美意識を加湿器に取り入れようと考えたの

ですか。

水盤のような、涼しさを感じる夏のイメージのものを、冬のもので作ったらどうなるだろうと考えたことが発端です。その考えの中で、湯気で冬のイメージをデザインしたいという気持ちが出てきました。湯気の形をデザインできるものとして加湿器を選んだわけですが、加湿器自体は現代の住宅ニーズに合わせて一般的になってきたもので、日本的な要素があまり見られないんですね。どういう方法で加湿するかという機能的な違いを除くと、形や色で差別化されている製品です。そこに日本の感性を加えることで、見る人の感性を触発させることができたと思います。

制作する上で工夫された点、苦労された点はどこでしょうか。

一番工夫したのが湯気の



上部を外し、水を入れる事ができる

形です。自分がイメージしていた湯気の形は、ゆっくりとフワフワ漂う感じなんですけど、そのイメージに近づけるのが大変でした。加湿器の構造を調べたり、蒸気口の形を変えたりしながら、湯気の出方を繰り返し研究しました。調べる過程で、5、6個の加湿器を買って分解しましたね（笑）。最終的には、従来の「蒸発する」水の形ではなく、水盤に湯気を「溜める」形によって、湯気の微妙な表情の移り変わりを視覚化しました。形状は、湯気を杯に溜めるようなイメージから自然とこのような形状に収まりました。

ただ、「湯気の形をデザインする」というコンセプトに至るまでは長かったです。卒業制作のテーマは自由だったので、「自分が表現したいものは何だろう。何をデザインしたらいいんだろう。」と悩みました。他にも作ってみた



担当教員の小山格平教授に、考案中のプロダクトについて説明中

かったものを、いくつもイメージしてみたいのですが、どうも自分の表現したいものと違うと感じて、しっくりこなかったんです。教授や非常勤講師の先生方に、自分の考えていることを話して、アドバイスをいただきながら、少しずつ考えをまとめました。

「MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD」への応募は、作品展より前から決められていたのでしょうか。

挑戦しました。
——昨年12月には授賞式と受賞作品展が開催されましたが、参加されていかがでしたか。

こういう大きな授賞式が初めての経験だったので、緊張しましたし、何だかあつという間に終わってしまった感じがします。向井周太郎先生にも初めてお会いして、作品のコンセプトや日本の感性についてお話し、先生のご意見を伺うことができ、とても勉強になりました。

——この作品を通して、ご自身が成長されたと思うところはありますか。

大学院生になってからは、「感性とデザインの関係」をテーマに研究していますが、

「潤杯」の制作をきっかけに、日本の美意識をより広く捉えたものづくりを目指すようになりしました。例えば風鈴は、吊るすことでは部屋が涼しくならないけれど、その音色が涼しさを誘うものですね。ししおどしも、聴覚と視覚の組み合わせが涼を呼ぶものです。そういう温度を直接感じる器官とは違う感覚器官から、涼しさや温かさを感じる工夫が、日本のプロダクトにはたくさんあります。その日本的なプロダクトの中には、形態が現代の住空間に見合わなくなってきたり、新たな素材で表現できるものもあるの、日本的な感覚を大事にした工夫を施して、社会に向けて提案していきたいと思っています。

ものづくりに対する興味は、いつ頃から芽生えたのでしょうか。

小さい時からものを作るのが好きでしたね。自分で作ったものを、身近な人によくプレゼントしていました。お裁縫でマスコットを作ったり、おばあちゃんに教えてもらった編み物でマフラーを作ったりしていたんです。自分が作ったものを誰かに使ってもらえることが、すごく嬉しかったですね。

——その経験が、ものづくりを京都芸大で学ぼうという方向につながったのでしょうか。

職業としてのものづくりを意識し始めたのは、プロダ

クトデザイナーという存在を始めて知った高校生のときですね。絵が描きたくて進んだ美術系高校で、「絵を描くこと」に対する情熱をまわりの同級生と比べてしまっ、自分の将来像に悩んだ時期があったんです。やりたいことが何なのかを思索し続けるうちに、小さい頃の経験を思い出して、自分がものづくりが好きだということを再認識しました。それで、大学ではプロダクト・デザインを学ぼうと決めました。

京芸を選んだのは、1・2年次は専攻に分かれずにデザイン科として、ビジュアル・環境・プロダクト、それぞれの分野のデザインを学べるのが決め手でした。3年次に専攻を選択するときは、広告やパッケージデザインなどの絵を描くことも楽しくて、ビジュアル・デザイン専攻に魅かれる部分もありましたね。でも、やっぱりものを作りたいなと思って、プロダクト・デザイン専攻に進みました。

——京芸大でもものづくりを学んだことの意義を教えてください。

京芸は「手でものを作っている大学」なんです。それが、ものづくりの感覚を身につけてさせてくれたと思います。京芸では、ものを作るときに、スタイロフォームを削って作る「モックアップ」という、外見を実物そっくりに似せた模型などを作るんですね。そのモックを削り出したりして、形状や使用感を実際に手に取って調べてから、実制作に入るんです。

今は、3Dプリンターのような、パソコンで作ったデザインデータをそのまま立体として出力できる時代だから、パソコンの画面上だけで想像してデザインしたものが製品としてできあがります。でも、製品を使われる方は、その製品に触れて使用されますよね。だから、自分が作ろうとしているものが、製品となり、お客さんが手に取って使われる様々な場面をイメージしながら、実際に手で触れて、どういう形がいいか、どうすると使いやすいのかを試行錯誤します。そういうプロセスを積み重ねる方法を学べていることが、私の財産になっていると感じています。

京芸は手でモノをつくることを大切にしている大学です。また、人数も少なく生徒と先生方との距離が近いのも京芸の特徴です。学生同士や学生と先生の距離が近いおかげで、人と人とのつながりが強くなります。そういったところが京芸の魅力だと思います。出ていける活動は、社会に出ていろんな活動して、いく上でプラスに働いたらいい。これからも友人や先生と過ごす時間を大切にしたいです。

Profile

HIRASAWA Asa

平澤 麻 (ひらさわ・あさ)
2012年 京都市立芸術大学 美術学部 デザイン科 プロダクト・デザイン専攻 卒業
現在 京都市立芸術大学大学院 美術研究科修士課程 デザイン専攻 プロダクト・デザイン在籍
2010年 中信学生デザインコンテスト 努力賞
2012年 京都市立芸術大学作品展 中井賞



第23回 五島記念文化賞 受賞

版画専攻 講師

大西伸明

——第23回五島記念文化賞のご受賞おめでとうございます。作品づくりについて伺いたいのですが、大西先生が、現在のような、モチーフの型を取った樹脂に、本物そっくりに着色するという作品づくりをされるようになったきっかけは。

僕は、版画専攻出身なんですけど、当時から版画の作品というよりも、版画の持っている構造そのものに興味がありました。版画を転写している瞬間は、完全に同じ表面を共有しているのに、離れた瞬間、違うものになる、その二面性に面白味を感じ、その構造を作品として形にできないかと試行錯誤した結果、樹脂を使った作品に辿り着きました。今制作しているような作品も、版画がベースとなっただけで確立されたものなんです。

——樹脂には一部だけ着色されずに透明のままだったり、本物とは少しだけ違う所を残されているのは何故ですか。

この表現を始めた当初は「オリジナルであるということ」「再生産可能であること」をテーマにしていたんです。でも、完全に物品として再生産してしまうと、それが偽物であることを、見た人が誰も気付かず、ただオブジェが置いてあるだけになってしまっただけです。それが再生産可能なものであるということを知るために、あえて着色しない部分を残し始めました。

もう少し言うと、「よくできた偽物」という評価を避けるために、最初はコレクションしな



lovers-lovers-#04 [2011, Painting on Resin]

い物をモチーフとして選んでいます。例えば花などをコピーして作ると、多分「すごく精巧で、よくできた偽物だ」というところに評価が留まって、そこから本来の自分のコンセプトに近づけないんじゃないかなと思っただけです。そこで、「くだらないものを透明にする」という方法に至りました。アルミホイルのお皿の作品なども、必ず捨てるものだからね。

——そういった意味で「選ぶこと」が僕の作品の本質で、選ぶ能力を高めていくことがとても大切なんですよ。例えば目の前のこのお皿を作品にしてくださいと言われた時に、発想を膨らませて絵を描いたりする手法を選ばない僕にとって、「このお皿は、どういう状況にあって、どういう物か」という「背景」を知ることに関しては、かなりシビアになります。モチーフが自然物の場合も、例えば枝の作品を作るとき、より絵画的な枝を使う時もあれば、これ

を作っちゃうと偽物っぽくなるなという枝もあつたりするので、やはり選ぶことには慎重になりますね。

モチーフを選ぶ基準というのは、ほかにも色々あって、複製品の複製とか、再生産できるとしてあえて再生産するというのもありました。ほかには、例えばお皿が割れると、その割れ方というのは一度しかできないオリジナルの形ですよ。完全にオリジナ



scrubbing brush / watermelon [2012, Through Printing]

ルな形状のものと全く同じものって、存在しないと思うんです。そういうものをあえてコピーするというのもしています。また、その時の展覧会のテーマに合わせてモチーフを選ぶ事もあります。

——2つの同じものを制作するようになった最初のきっかけは何ですか。

あれは2つあるということとがコンセプトなんです。モチーフを厳選する方法とは別の方法で作品を研ぎ澄ませたいと思いついて、複数作るということを積極的に考えてみようと思いました。

「2」という言葉に注目したのは、本物が偽物かわからなくなる数だということが理由の一つです。1つだとさっき言ったみたいにオリジナルになってしまい、ただオブジェがあるだけになってしまふ。3つ以上になると、数が

意味を持ち過ぎてコンセプトがブレてしまう。同じものが2つだと、僕が作ったものが「フェイクなのか本物なのか」どちらかが本物なのかどちちらともフェイクなのかの解答をいったん棚に上げてしまえるんですよ。僕が言わない限り、もしくは触って確認しない限り、見る人には分かりようがない。ということとは、フェイクであるか否かと、そういうことはいったん隅に置いておいて、他の角度から作品を観ることに繋がるのでは、と思いつきました。版画的な観点からも、ネガポジや凹凸の関係にも繋がるので、2という数字はかなり面白いと思いついて、「2」をテーマにしました。

——昨年ごろから「スループリントイング」という独自の技法で版画作品も展開されていますが、どういう技法なのですか。

単純に言うと、インクジェットプリントのようなものです。版画というのは基本的に物質の転写なので、凹と凸の物質を引っ付けないと出来ないのですが、そこに距離を与えることが、何か面白いことを生み出すのでは、と思ったのが、この技法を提案したきっかけです。紙から版を少しづつ持ち上げて距離をつけながら、インクをスプレーで吹き付けて定着させるやり方をすると、距離が近いところのみ焦点が合って、離

れているところは焦点がぼやけて、物質に委わっていくことを発見したんです。このアイデアで何かものづくりをしようと思いました。

「教員として、大西先生から見た今の京芸生の印象はいかがですか。」

今の学生は自分の学生の頃に比べてすごく真面目ですね。しかし、野心を持っているとは思いません。表に出さない世代なのかなという印象もあります。あと、少数というのはいくく良い環境で、各々にとっても密な関係がある。その密な関係の中に、仲間でありながらもライバル意識を持っているなど強く感じる。ことがありますがね。京都芸大はそういうところが面白いと思います。

「学生たちにどういう風に育って欲しいと思われませんか。」

学生たちがそれぞれ自分らしい出口を見つけることを願っています。あと、僕自身が驚くようなものを作ってくれたら嬉しいですね。

「大西先生が自分らしいスタイルを見出されたのは、どの瞬間でしたか。」

「継続される」と思いました。

「その感動の瞬間とは、どんなことだったのですか。」

豊田市美術館で、草間彌生さんの白いペインティングを見た瞬間に涙が出て、「あ、こういう感覚って自分にもあるんだ」と。あんなに感動したことは、それ以降もないですね。自分の抱えている問題意識とその作品が、ちょうどぴたっと合ったという感じがした。特に草間さんのコンセプトと自分のそれが凄く近いわけでも無いのですが、偶然タイミングが合ったのかも知れませんね。

「大西先生が今の表現に辿り着かれてきた感動を、学生にも味わって欲しいですね。」

味わえたらいいと思います。けれど、大学にいる間に得なければと急ぐ必要はないと思います。僕は60歳くらいでものづくりのピークを迎えるのが良いと思うんです。だから自分もまだまだ頑張らないといけないですね。

「第23回五島記念文化賞として、春から1年間、ドイツでの研修を獲得されました。」

どのような活動をされる予定ですか。

ベルリン芸術大学に籍を置かせていただき、「象徴」について研究する予定です。象徴といっても、「古い絵画の中に描かれたイメージが、どういう意味をもっているか」という事だけじゃなくて、例えば日本だったら、蚊取り線香といえは色は緑であるとか、そういう日常にあるモノのイメージが、海外ではどうい風を受け取られているのかということもリサーチしに行こうと思っています。

それとモチーフの収集も。僕の場合、「選ぶ」という行為が作品の大きな比重を占めているので、それが海外でどうい風に受け取られるかというのを理解しないまま提示してしまうと、そこからのコミュニケーションが生まれなくなるので、そこをしっかり確認しに行こうと思っています。例えば、アメリカだったら釘の作品とかがすごく評判が良くて、ヨーロッパだったらコップの作品が評判が良いとか、なにか傾向のようなものがあるんです。どう

してなのか、よくわからないところがあって、そのあたりの認識の違いは面白いなと思うので、可能な限りコミュニケーションをとって、色々聞いてみようと思っています。

「これからの1年間、先生の立場を離れ、ご自身の活動に専念できるというのはすごく貴重ですね。」

そうですね。先生の仕事を一生懸命やっていると、自分の制作は展覧会をこなすのが精いっぱいなので、出力ばかりが続けがちになります。これからは入力の1年間として、いろんなことを改めて考えたりしたいです。

「今後、新しく取り組んでみたいことはありますか？」

子どもたちに何ができるかという事を考え始めています。自分が小さい時の事は、くだらないことなのに、なぜかずっと覚えていっている感じが、作品で表現できたらすごく面白いなと思うんです。けどね。まだまだわからないことが多いので、これから色々探ってみたいと思っています。

Profile

ONISHI Nobuaki <http://nobuakionishi.com/>

- 1998年 京都市立芸術大学大学院美術研究科版画修了
- 現在 京都市立芸術大学美術学部版画専攻講師
- 2004年 京都府美術工芸新鋭選抜展・最優秀賞
- 2007年 あおもり国際版画トリエンナーレ 2007 あすなろ賞
- 2008年 第1回岡山県新進美術家育成「I氏賞」大賞



くすみ・訛り・摩滅を生きる

—— 伝統音楽・芸能の思想 ——

日本伝統音楽研究センター 教授

藤田隆則

京都をはじめ日本各地には、様々な伝統音楽・伝統芸能が、今も受け継がれています。その伝承は、小さな共同体によって、神事や仏事等、特定の場で行われることが多く、接近の機会があまりありません。仮に接近できても、テンポは遅く、時間は長く、参加には苦痛がともない、理解不能だったりするため、若い人には人気がありません。

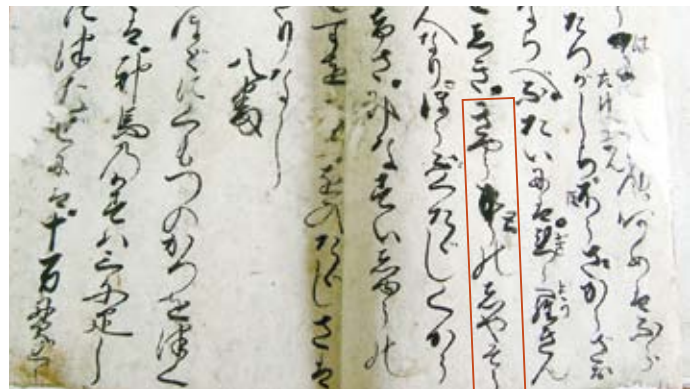
くすみ、訛り、摩滅したように見える、それらの伝統に、接近しやすくする特効薬があります。それは、本来の原形をあぶり出すことです。原形はいつもシンプルで、スビード感があり、即興性を生み出し、私たちをワクワクさせてくれます。ところが、日本の伝統を調べていると、一度被ったくすみ、訛り、摩滅を、そのまま引き受ける場面に会ったことがあります。

昨年の公開講座に奈良県から、題目立という神事芸能の保存会の方を招きました。題目立は、平家の物語を旋律にのせて語り歌う芸能で、ユネスコの無形遺産にも登録されています。題目立の歌詞の中には、長い伝承の過程で、意味が変わってしまった言葉があります。それらを原形にもどせば、より面白いドラマになり、ファンも増えるのではないかと。そういう狙いもあり、公開講座に先立って、歌詞改訂作業に取り組みまし

た。

〈厳島〉という曲の中に、平清盛が厳島で挙行した儀式の華やかさを描く場面があります。歌詞には「京奈良の社僧は百二十人なり」という一節があります。京都や奈良から120人もの僧侶が、はるばる厳島にやってきた、と理解できます。しかし、保存会に残る江戸時代末頃の本には「京奈良」ではなく「きやうたう」と書かれていました(図参照)。つまりもとの歌詞は「行道」で、この一節は、堂を廻りながら読経する僧が120人にのぼった、という意味だったのです。伝承の過程で「たう」の仮名が「なら」と誤写、誤読され、「きやうなら」と記され、「京奈良の社僧」と定着してしまったのです。

この事実が判明したことを受入れたつも、保存会の方々は「自分たちは親や先輩から「京奈良」と習い、そう歌ってきた」ことを尊重され、今後も「京奈良」と歌いつづけることを選択されました。原形から離れたことがわかっていても、責任をもって直さないうで伝える態度には、ときに崇高ささえ感じられます。民俗芸能の担い手の思想や実践には、学ぶべき点がたくさんあると思います。



弘化四年の〈厳島〉の写本。「きやうたうのしやそう」とあるうち「たう」が消され、その部分に修整が加えられている。



公開講座「題目立への誘い」におけるワークショップの一場面
2012年10月6日(土) 新研究棟7階 日本伝統音楽研究センター合同研究室1にて

What's Den-on?

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター(通称:でんおん)では、日本の伝統音楽や芸能についての研究成果をさまざまな形で発信し、多くの方に理解を深めていただけるよう、どなたでもご参加いただける講座やセミナーなどを定期的に開催しています。

日本の音楽・芸能に関する一般書籍・古文書・楽譜・録音映像資料・楽器等を収集する専門図書室も備えています。専門スタッフがお手伝いするレファレンスサービスもあり、どなたでも閲覧可能です。是非お越しください。

日本伝統音楽研究センター図書室
(京都市立芸術大学 新研究棟6階)

開室日時

水・木・金曜日

10:00-12:00, 13:00-17:00

<http://w3.kcuu.ac.jp/jtm/>

持つはなし

彫刻専攻 教授

中原浩大

持つはなし。
 1989年のこと、アントワープのとある日本料理レストランで、その場にいた他の人たちに比べると若輩の2人が少し離れた席で会話していた。
 「ボクは全部を持っておきたいんだ。」(両手を広げて目一杯抱え込むような仕草)
 「全部(とにかくゼーンぶ)持っておいで、何年かしてふと取り出して眺めてみたりするんだ。」(片手で拾い上げたものをゆっくりと見ている仕草)
 「ワタシは、片手に持てるだけを持っていたい。」(肩の高さぐらいの位置で、少し丸くした手のひらの中にあるものをこぼさないように大事にしている仕草)
 「両手じゃないの？」
 「両手で持ってしまうとそれだけで薄まっちゃう気がするんだよね。」
 こんな大切な会話をどうして忘れていたのだろう。
 ボクとはボクのこと、ワタシは青木野枝さん。
 そのときから23年経った昨年の12月、豊田市美術館で開催されている「青木野枝|ふりそそぐものたち」の関連企画で青木さんと対談をする。
 最後に会ってから22年ぶりの再会になる。
 その日、美術館の通用口を出て近くのレストランにつづく坂道を下っていきながら、
 「お子さんできたんだよね。」
 「うん、もう生まれた瞬間から世界の真ん中にいるよ。」
 「そう？世界の真ん中になんていたかなー。どう？自分が世界の真ん中にいた記憶なんてある？」
 「そうか、そう言われると自分がそうだった憶えは無いなあ。」
 レストランで、
 「グッゲンハイムのと違って、…」
 「いない、いない、ファルマコンが最後だと思うよ。」(1990)
 「あれ？そうか、一緒やったと思ってた。ボク結婚しますって話しましたよね。」
 そして、1989年のベルギーでのグループ展の話を。
 「ダントと一緒に行ったよね、Open Mind 一緒に見たよね。」
 「憶えてる？コーダイくん。ボクは全部持っておきたいんだって言ったのよ。」
 「えっ？そのはなし、今してしまっただ大丈夫？」(何だっけ)
 昼食が終われば、青木さんとの対談が控えている。メールのやりとりでボクはこんなリクエストを出していた。

(意外と思われるかもしれませんが)「彫刻」についてのお考えが聞ければと思います。
 最近昔話をする機会が多いのですが、
 1980年代後半に一部の作家達の思考がどうして絵画や彫刻へと向かったのか、
 当時の自分もそうだったのですが、そこへと向かい始める納得のできる理由を思い出せない部分があります。
 この辺りの記憶を穴埋め出来ればと。

大丈夫？なんて冷静を装ったけれど、リクエストのことなど、どうでもよくなってしまった。そのあとは、あれからボクがどんな日々を暮らしていたのかをこの人にちゃんと報告しなければ、
 (案の定、青木野枝展での対談であるにもかかわらず、予定時間の大半を自分の説明のために使ってしまった。)

対談中での話題からひとつだけ。
 青木さんは、個展カタログに収録されているインタビューの中で、「私は彫刻家になりたいと思っている」と答えている。過去の発言の引用ではなく、今回収録されたインタビューでのいわばリアルタイムな発言である。私は彫刻家になりたいと思っている。これを理解するには宙に浮かせて考えてはいけない。いつかどこかはなしではなく、この世界を、この時をこの場を生きることから辿り着く生々しい表明として考えると、「わたしは画家だ」と「わたしは彫刻家だ」という日本語ですら実は全く異なる内容と心情から生まれ発せられる、全く異なる意図を指し示す言葉となる。青木野枝が、今、私は彫刻家になりたいと思っていると語るということ。そうできしあり得ない姿を獲得する様も、生む意味やニュアンスを厳密に言い当
 対談を終えて帰宅してからその続きを考えていた。この答えを導くにふさわしい設問を想像するとき、この答えは彼女の彫刻に対する考えやそれが何であるかについて答えたものではないと気付く。おそらくこの設問には彫刻という単語は含まれていない。彼女がその設問に答えようとする時、彫刻という言葉が微塵も含まれていない自分をイメージ出来ているのだろうと思う。そして、はなしはフリダシへと戻る。

持つはなし。
 1989年のこと、アントワープのとある日本料理レストランで、その場にいた他の人たちに比べると若輩の2人が少し離れた席で会話していた。
 「ボクは全部を持っておきたいんだ。」(両手を広げて目一杯抱え込むような仕草)
 「全部(とにかくゼーンぶ)持っておいで、何年かしてふと取り出して眺めてみたりするんだ。」(片手で拾い上げたものをゆっくりと見ている仕草)
 「ワタシは、片手に持てるだけを持っていたい。」(肩の高さぐらいの位置で、少し丸くした手のひらの中にあるものをこぼさないように大事にしている仕草)
 「両手じゃないの？」
 「両手で持ってしまうとそれだけで薄まっちゃう気がするんだよね。」
 「私は彫刻家になりたいと思っている。」
 「コーちゃんは、ゴギガ？」
 と、書いてみて感じる依存度の高さと恥づかしさは何だろう。この孤独には、ボクもひとりて答えることが必要なのだろう。
 あるとき、風の噂にボクの駄目っぷりを聞いて、京都までぶん殴りに行ってやろうかと思ったという。また機会がありますように。
 2013.01.19

こう締めくくって書き終えたつもりだった。でもなんか違うんだよね。
 実は、ちょっとした続きがある。
 対談から数週間経った年の瀬のこと、ボクは収蔵作品の修理に豊田市美術館を訪れていた。
 青木さんはそのとき搬出作業の真っ最中で、お互いの休憩が重なり学芸室でばったり合うことに。
 この会話ははなしになった。そして青木さん曰く、「ゼーンぜん違うねってはなし。」
 その一言が何となくひっかかっていた。そうなんだよな。何のはなしだったか考えてみたところで、
 そこに至る経緯や、お互いが抱えていたことや、この会話に重ねようとしていたことを辿ってみると、
 とでこの会話の真意を探そうとすること、この会話が生まれるということは違う。ボクたちはたと
 いにおもいきり想像し合うことだった。
 だから、これはまぎれもない、持つはなし。
 2013.01.21



「Right Hand-B」1996 (1995 撮影、2012 再プリント) ラムダプリント、アルミ、アクリル 90.0 x 110.0 cm

【註】
 「青木野枝|ふりそそぐものたち」豊田市美術館・名古屋市美術館連携企画
 2012年10月20日～12月16日
 「中原浩大 Drawings 1986-2012 |コーちゃんは、ゴギガ？」伊丹市立美術館
 2012年9月22日～11月4日

公立大学法人化シンポジウム

京都市立芸術大学は、創立130有余年の歴史を継承しながら、一層の発展を目指して、2012年4月1日に「公立大学法人京都市立芸術大学」として新たな第一歩を踏み出しました。

これを記念して、6月29日に、本学において創立記念式典及び記念シンポジウムを開催。シンポジウムでは、元学長で名誉教授の梅原猛さんが「京都の芸術と伝統」というテーマで講演。また、コディネーターの建昌哲学長の元に、財団法人国際高等研究所長の尾池和夫さん、華道家元次期家元の池坊由紀さん、卒業生で声楽家の菅英三子さん、卒業生で彫刻家の名和晃平さんの4名のパネリストをお招きして、「国際的な芸術文化の都である京都の芸術大学」をテーマに、パネルディスカッションを行いました。

お越しいただいた方々からは、京都芸大の持つ強みを生かした取組の推進など、今後への期待の声をお寄せいただきました。



キャリアアップセンターを設立

4月から「キャリアアップセンター」を設立して、在学生・卒業生のキャリアサポートを充実させています。

同センターには、就職相談員に加えて、新たに、現役の作家や演奏会の企画を行う美術アドバイザーと音楽アドバイザーが就任。作家・音楽・就職活動などの「やりたいこと・目指したいこと」を、具体的なアドバイザーと豊富な情報でサポートしています。

2012年度は、芸術活動支援では、「現代をたくましく生き延びる」をテーマに、作家や卒業後10年の京芸生など、「たくましく生きる」方を招いた講演会やパネルトークを開催。就職支援では、新たに芸術系他大学との合同企業説明会を実施し、ハローワーク若年相談コーナー担当者と連携した就職相談も始めました。その他、「ポートフォリオ講座」や「確定申告入門講座」などの実践的なセミナーの開催や、様々な方法で自らの道を進む卒業生へのインタビューをまとめた「瓦版」の発行などに取り組みました。



「ポートフォリオ講座」の様子

中央美術学院（中国）との交流協定締結

5月に、中国の中央美術学院が交換留学協定を締結しました。

これにより、京都芸大の交流協定提携校は、美術学部・大学院美術研究科8校、音楽学部・大学院音楽研究科5校となりました。

中央美術学院は、1918年に創立された中国で最も歴史のある、美術教育機関として最高峰の国立大学です。伝統的な芸術分野から現代アートまで幅広い分野で世界的に活躍する作家を数多く輩出しています。

10月から、第1号留学生として谷中佑輔さん（修士1回生、彫刻専攻）を中央美術学院へ派遣し、劉ト華さんを京都芸大に受け入れ、それぞれ自身の制作テーマを深めながら留学生活を送られました。



中央美術学院にて懇談する鶴田憲次法人副理事長と潘公凱院長

「京都芸術教育コンソーシアム」の設立

8月に、京都の5つの芸術系大学（京都市立芸術大学、京都嵯峨芸術大学、京都精華大学、京都造形芸術大学、成安造形大学）と京都市、京都市教育委員会及び京都市図画学校教育研究会、京都市立中学校教育研究会が、京都市立各大学の教育資源を生かし、各大学の教育資源を生かし、図画工作・美術の授業の充実や子どもたちが芸術を身近に感じることができるよう風土づくりを目指す「京都芸術教育コンソーシアム」を設立しました。

設立記念式典において、門川大作京都市長、生田義久教育長、各大学の学長などが行動宣言を発信。各芸術系大学によるアート体験教室も催され、京都芸大の「親子で参加できる工芸教室」には、美術学部の学生と教員の指導のもと、約50名の児童と保護者にご参加いただきました。

京都芸大は、これまでから、市内小学校において、京芸生などの滞在型制作や工芸教室・水墨画教室の開催などを進めてきており、当コンソーシアムを生かして、連携活動の一層の充実を図ります。



サイレントアクトア 2012

9月に、東日本震災の災害支援を目的としたチャリティオークション「サイレントアクトア2012」を、昨年引き続き開催しました。

作家名を伏せた匿名方式で行われた本オークション。会場はギャラリー@KUNO（アクトア）には、連日多くの方にご来場いただき、現役の京芸生や教員、元学長、元教員、卒業生が名を連ねる出品者リストを片手に、作品をじっくり眺める姿が見られました。また、作品を公開する専用ウェブサイトへのアクセスは昨年より大幅に増え、作品をオークションで落札するという非日常的な行為を楽しみながら、被災地支援につながる本オークションへの興味の高さが伺えました。2週間あまりの会期中に、来場者は1,202名、ウェブサイトに上り、総入札数は1,655を数えました。

盛況のうちに終了した本オークションは、開催経費を除いた収益の全額3,500,000円を、被災地での芸術を通じた支援活動を行っている社団法人「対話工房」に寄付しました。



オークションを楽しむ門川大作京都市長

アーティスト・イン・レジデンス事業の実施



学内で行われたヘリング氏のワークショップに参加する学生たち

京都市立芸術大学と京都芸術センターでは、国内外からアーティストを一定期間招へいして、滞在中の活動を支援するアーティスト・イン・レジデンス事業を実施しています。

2012年度に招へいたアーティストは、ニューヨーク在住のオリバー・ヘリング氏。都市に生きる人々の生活の有様に関心を持ち、一般の人が参加する即興的なビデオ作品やパフォーマンスを中心に制作されています。

ヘリング氏は、京都芸術センターで制作活動と並行して、京都芸大において、ワークショップを行ったり、学長や教員との鼎談「アーティスト・トーク」に参加したりと、積極的に活動され、京芸生は世界を舞台に活躍するアーティストとの交流を大いに楽しんでいました。

連続シンポジウム「創造のためのアーカイブ」Part.1・2



パート1の出演者によるパネルディスカッションの様子

歴史都市・京都が生み出してきた豊かな芸術文化資源を、未来の創造活動を触発する「創造のためのアーカイブ」としてとらえ直す連続シンポジウムを開催しました。

10月に開催した「パート1は、「未完の歴史」と題し、加治屋健司氏（広島市立大学芸術学部准教授）、美術学部の加須屋明子准教授、石原友明准教授と、特別ゲストの森村泰昌氏（美術家）、塩見允枝子氏（音楽家）が、実作品を披露しつつ、アーカイブの可能性と不可能性をめぐるスリリングな問題を提起しました。

さらに11月には、「パート2として、「物質と記憶」と題し、芸術を媒介にした脳科学と哲学の「対話の場の形成」と、アーカイブ理論の新たな研究の可能性を探るシンポジウムを開催。下條信輔氏（カリフォルニア工科大学教授）、篠原資明氏（京都大学教授）、建島哲学長のレクチャーのほか、美術学部の高橋悟教授による実験、プレゼンテーションと、出演者によるパネルディスカッションを行いました。

山中晴夫教授、柏木加代子教授が退任



2013年3月末をもって退職する美術学部の山中晴夫教授の退任記念展、柏木加代子教授の退任記念講演会を開催しました。

山中晴夫教授は、本学工芸科塗装専攻を卒業後、木工作家として国内外で活躍され、2008年から漆工専攻の専任教員として多くの学生に「物を作る楽しさ、喜び」を伝えてこられました。

「山中晴夫退任記念展」には多くの方が来場され、木の温かさあふれる作品を楽しむ来場者の表情には、たくさん笑顔が見られました。



柏木加代子教授は、バリ大学、大阪大学を卒業後、フロベールを中心とする19世紀のフランス文学を研究。1979年に本学専任教員となり、語学・文学教育を通じて、芸術を学ぶ上での基礎教育に取り組んでこられました。

「フロベールと芸術」と題した退任記念講演会では、ご来場の方々が、最後の講義を惜しみながら、柏木教授との交流の一時を過ごされました。

編集後記

第16号から、タイトルが「京芸通信」になりました。「芸大通信」が2003年に復刊第1号を発行してから10年が経過した2012年は、公立大学法人という新たな体制で大学運営をスタートした年。今、改めて京都の総合芸術大学である「京芸」となり、改めて「京芸通信」となりました。

京都市民をはじめとする多くの京都芸大ファンに慣れ親しんでいただいた「芸大通信」を引き継ぎながら、「京芸」の魅力と教育研究の成果をお伝えできるを誌面作りに取り組んでまいります。

京都市立芸術大学全学広報委員会一同

新任教員の紹介

2013年4月から、深谷訓子（ふかや・みちこ）講師、大矢一成（おおや・かずなり）講師が着任します。



深谷訓子講師の専門はオランダ17世紀美術。京都大学文学研究科博士後期課程を修了後、尾道市立大学芸術文化学部の教員として勤務。

京都芸大では、西洋美術史等を担当。

大矢一成講師の専門は漆工芸及び木工芸。京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程（漆工）修了後、株式会社興石の指物（さしもの）部に勤務。

京都芸大では、漆工の木工実技を担当。

11名の客員教授をお迎えします

京都芸大では、2012年度から新たに、世界を舞台に活躍する著名な方々に客員教授として就任していただいています。

2012年度に就任された尾高忠明氏は、第142回定期演奏会の指揮者として、伝統ある定期演奏会を学生とともに作り上げていただきました。同じく2012年度に就任された金剛永謙氏は、能楽の実習授業において、謡いの発声などの実技などを通して学生の能楽への理解を深めていただきました。



尾高忠明氏
指揮者



金剛永謙氏
能楽金剛流26世宗家

新井清一氏
建築家



大友直人氏
指揮者



ハンス・エルク・シェレンベルグ氏
オーボエ奏者、指揮者



森田リズ子氏
日本画家



大友直人氏
指揮者



広上淳一氏
指揮者



森村泰昌氏
美術家



時田アリソン氏
日本の語り物芸能研究者



皆川魔鬼子氏
テキスタイルデザイナー



横尾忠則氏
美術家

Contribution

京芸をご支援くださるみなさまへ ～京芸友の会～

京芸の教育研究等の充実を図るため、ご寄付をお願い申し上げます。「大学主催の展覧会、演奏会、公開講座等への助成」「教育研究活動への助成」などから寄付用途を選んでいただき、皆様のご意向にかなう運用を致します。

ご寄付をいただいた方は、手続きを行うことで税控除や損金算入の措置が受けられる場合があります。また、一定の金額以上ご支援いただいた方には本学からのオリジナル特典がございます。詳細は、大学ホームページをご覧ください。

問合せ 京芸友の会担当 電話：075-334-2200

京都市立芸術大学 広報誌
「京芸通信」Vol. 016
2013年3月発行

発行 京都市立芸術大学

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町 13-6
TEL 075-334-2200 (代表)
FAX 075-332-0709 (代表)
http://www.kcua.ac.jp/
Facebook ⇒ http://www.facebook.com/kcua.ac.jp
Twitter ⇒ http://twitter.com/kyoto_geidai